

「一番高い塔の唄」

アルチュール・ランボー

何かにつけて服従する一方の のらくらな青春よ
こまやかな心遣いのために
ぼくの一生を棒にふった
ああ 時よ来い みんなの心と心が 寄り添うかの時よ

ぼくは呟いた もういいじゃないか 姿をくらましてしまえ
もっと高尚な喜びを 味わおうなんて期待しないで
何があっても引き返すんじゃない 厳かな退却だ

ぼくは本当に我慢した 永久に忘れ去ってしまうほどに
恐れも苦しみも空に向かってとんでった
身を蝕む渴きのため ぼくの血管は黒ずんでくる

まるで草原のようだ 忘却にゆだねられて 広がりゆき
迷迭香と毒麦の花が咲いている
沢山の汚らしい蠅が ぶんぶん唸り狂っているなかで

ああ こんな哀れな魂の やもめ暮らしにゃ際限がない
その魂が抱きしめるのは聖母の面影だけなんだ
祈りを捧げようってのか 聖母マリヤに

何かにつけて服従する一方の のらくらの青春よ
こまやかな心遣いのために
ぼくは一生を棒にふった
ああ 時よ来い みんなの心と心が 寄り添うかの時よ